

## 経済のグローバル化と教育の役割

土屋 武志 (社会科教育講座)  
ナスティオン (スラバヤ国立大学 (インドネシア))  
ムムチヨウ (第一ボータウ高等学校 (ミャンマー))  
真島 知秀 (高麗大学校大学院 (韓国))  
(2007年10月31日受理)

## The role of education in the economic globalization

Takeshi TSUCHIYA (Aichi University of Education)  
Nasution (University of Surabaya)  
MuMu Kyaw (No1 Botataung High School)  
Tomohide MAJIMA (Korea University)

**要約** 東アジア地域では、経済のグローバル化と地域文化の活性化という二つの課題を同時に解決しなければならない状況がある。この地域のグローバル化は日本・韓国・中国とASEANの関係を緊密化させている。この関係は、経済的関係であるが、実態としては、人間同士の交流の姿を取る。将来のアジアで活躍する市民をどのように育てるか。このことは、日本・韓国・中国そしてASEANの共通課題である。このような視点から、歴史的アプローチと新聞アプローチの二つのアプローチが重要性を増すと考えられる。

なお、本稿は、2007年6月25日にマレーシアのペナンで開催された国際会議「International Management Education Conference 2007」(スルタンイドリス大学主催)における報告の一部をまとめたものである。土屋を研究代表者として報告した。本稿は、共同研究に基づき日本語部分を土屋が、英語部分をナスティオンとムムチヨウ、韓国語部分は真島が執筆した。両部分は内容的に同じである。

**Keywords:** グローバル化 歴史的アプローチ 新聞アプローチ 市民権

### 1. 経済のグローバル化と新しい市民権

ヨーロッパでEUが成立した。そのことによって、ヨーロッパで、新しい視点が生まれた。それは、Multiple Citizenship (多重市民権) という考えである。これは、Derek Heaterが主張している。彼は、イギリスの政治学者である。彼は次のように考えた。今の世界は、グローバルに経済が発展している。そのため、一つの国家の中に複数の国籍の人々がいる。だから、国民のみに与える市民権という発想は、現実に対応できない。私たちにはMultiple Citizenshipという新しい考えが必要である<sup>\*i</sup>。彼のこの提案は、市民の権利は、国家のみから与えられる権利に限定されないという提案である。つまり、一人の個人がいくつかの市民権を持っている<sup>\*ii</sup>。

この新しい視点は重要である。なぜなら、この視点は、近代国家の中の一つの市民権と異なるからだ。「国民としての市民権」だけが市民権でない。この発想は、私たちにより多くの選択肢を与える。たとえば、たとえ国家同士が対立する場合であっても、国家の立場とは違う視点から、市民同士の協力や合意が可能になる。このように21世紀の社会は、重なり合ういくつかの市民社会に所属するという社会が出現しつつ

ある。私たちは、あるときは地域市民であり、あるときは国民であり、また、世界市民やアジア人である。

このように、私たちは、重なり合う複数の社会の中にいる。そして、私たちは、その社会の中で、立場の違いいくつかの「情報」に向き合う。このようなグローバル化は、教育を変化させる。つまり、1) 市民が複数の市民性に関わっていることを自覚する。2) その多重性の中で有益な情報を選択し、組み立てて、自ら判断する。このような能力を伸ばす教育が必要になる。このように、経済のグローバル化は、教育に影響を与える。では、学校教育においてはどのような変化が見られるだろうか。

### 2. 複数の市民権に気づくための2つのアプローチ

#### 1) 歴史的アプローチ

私たちは、現在の国家の一員としての視点だけにとらわれがちだ。そのような事態を避けるためその方法は、現在の国民国家が古代から変わらないという見方を変えることである。私たちが古い視点を改善するには、18世紀以前の歴史を学習することが効果的である。18世紀のアジアは、現在のような厳格な国境システムは存在しなかった。国境を意識せずに自由に移動する人々が多かった。日本の場合、17世紀から19世紀

の間、日本政府は、厳密な国境管理を行なった。しかし、日本以外の地域は、中国やヨーロッパのネットワークの中で自由で活発な交流があった。その時期の日本政府は、そのネットワークを利用して管理貿易をおこなった。東南アジア地域からの輸入品は貴重であり、高い値段で取引された。ジャワやマレーシアの織物や植物などは、人々が欲しが的高级品だった。日本の発展は、そのような歴史に支えられている。私たちが国家を越えて協力するとき、このような歴史上の交流関係は、人々の考え方をグローバルにする。このような歴史的な視点は、グローバル化の進展とともに重要性を増している<sup>\*iii</sup>。

## 2) 新聞アプローチ

20世紀末、日本はグローバル化が進んだ。その結果、地域に住む日本国籍の住民と外国籍住民との文化摩擦が社会問題となっている。そのため、文化摩擦を地域社会の問題として住民自身が解決する能力が必要だ。学校では、生徒たちが将来の町づくりを提案する学習が行われている。これは、地域を学習することがグローバル学習になっているということである。「local」と「global」が混在している。そのため、「act locally」のための学習が「think globally」のための学習になる<sup>\*iv</sup>。このような学習に効果的な教材が新聞である。新聞は、現実の社会を知る効果がある。日本では、新聞を学校教育に活用する教育方法が注目されている。NIE (Newspaper in Education) である。日本は、20世紀の前半に「侵略戦争」という大きな過ちを犯した。その過ちは、民主主義のシステムを使って行われた。当時の日本は、軍隊が議会よりも大きな影響力を持っていたことも事実だ。しかし、新聞をはじめとするジャーナリズムが侵略戦争を防ぐことができず、むしろそれを促進した。日本の人々は、このことを反省している。だから、ジャーナリストたちは、批判的な視点に価値を持つ。日本では、情報を読み取る能力と情報を伝える能力が大切だと考えられている。歴史を反省した結果である。新聞は、トレーニングされたジャーナリストたちによって選択され、紙に印刷されて提供される。毎日発行される新聞には、2冊の本を読むことと同じ情報量があるといわれる<sup>\*v</sup>。そこには多くの情報がある。

グローバル化の中で、情報を整理して判断する能力が重視されてきた。この過程において、複数の視点から考え判断することが必要であるといわれ、日本の社会科学学習指導要領にも多面的多角的な思考力を重視するよう示されている。情報活用能力を育てるために、生徒があるテーマを決め、そのテーマで新聞記事をスクラップしていく学習や自分自身で新聞をつくる学習がある。新聞は、信憑性があり、かつ、最新の情報を伝えるメディアとして、今の日本では信頼されてい

る。そのため、大学などの入学試験にも新聞記事や新聞での論説が用いられる。もちろん、そのような問題は、覚える学習でなく、情報を批判的に読み取り、生徒自身の考えを明確にする論理力を評価する方法と見なされている。最近では、インターネットなどのコンピュータネットワークが急速に発達している。しかし、新聞はなお重要な情報源として、教育の中で重要な役割を担っている<sup>\*vi</sup>。

## 3) 2つのアプローチの共通課題

歴史を学習した結果、生徒たちは人間の相互関係を時間軸にそって理解する。また、新聞を使った学習の結果、生徒たちはいくつかの視点から最新の情報を読み解き、現代社会に対する批判的思考を深める。彼らは、異なる情報や立場を理解して考えようとする。

見方・考え方の多様性があることが社会にとって良いことを理解するため、生徒たちに討論の機会が必要である。学習活動では討論の機会が与えられるべきである。自分自身が、討論を経験する。その結果、彼らは互いに他者への共感や信頼を持つ。それは、多様な市民性がある現実のグローバル社会に必要な能力と考えられる<sup>\*vii</sup>。したがって、上記の2つのアプローチは、生徒たちの討論を伴う学習である<sup>\*viii</sup>。教室には、文化的に異なる他者がいる。そのような環境を活かした教育実践が現在の日本社会をはじめとするグローバル化した社会に共通する今日的課題となっている。

## 3. 経済のグローバル化と未来のアジア

アジア地域では、日本のファッション雑誌や芸能雑誌、コミック誌からコピーした情報があふれている。また、都市や観光地では、英語はもちろん中国語、韓国語そして日本語の看板がある。日本からはるか離れた地域にも情報はリアルタイムで送信される。日本のファッションやミュージック、ゲーム、アニメキャラクターなど多量の情報が日本から発信されている。ネット化社会にあつては、インターネットを通じてリアルタイムで日本商品への興味を増幅させている。

その一方で、日本人への批判もある。たとえば、「日本人は韓国では自分たちのやり方を押しつけ、タイやインドネシアでは重要な話題になると日本語で日本人だけで話をする。」これは日系企業の駐在員に対する現地の評価の一つである<sup>\*ix</sup>。このようなエピソードは、日本企業が生産や販売の拠点をアジア地域に移動している現状を表している。日本文化が移転することは、技術やその技術を指導する人の移転が進むことを意味する。1980年代以降、アジア諸国は、積極的に日本資本を取り入れた。そして、それを経済発展に結びつけた。しかし、その反面、文化摩擦が起きている。経済のグローバル化は、単にモノだけが行き

来する状態とは言えない。モノと同時に人と文化が行き来している。それは貿易統計上には現れることはない。日本の貿易額は、統計上もアジア地域との貿易が北米を抜いて一位である。たとえば、マレーシア製の商品が実際は日本の技術と生産管理方式で生産した商品という場合がある。しかし、そこでの文化摩擦は貿易統計には表れない。

日本企業がアジア各地で経験するさまざまなトラブルがある。それは、将来、アジア各地域に出かけて仕事をする日本の若者にとって、切実な課題である。経済のグローバル化は、人間が関わり合うことを意味している。人々がどう付き合うか。経済のグローバル化は、人間同士の他者理解を必要とする。

そのようなグローバル化の中で、日本経済における注目すべき現象が一つある。それは、グローバルな商品が流通する一方で、ローカルな伝統的な商品も価値が高くなっているということである。

つまり、地域の伝統的な商品の価値が高くなっている。また、本来はグローバルな商品であるテレビ受像機も、作られた日本国内の工場の名前がブランドとなって、高く売れるような現象もある。経済のグローバル化は、地域への関心を逆に高める。

ASEAN は、経済のグローバル化と地域文化の活性化という二つの課題を同時に解決しなければならない必要に迫られている。日本・韓国・中国3国は、ASEAN の将来に大きく影響する。それは、経済的関係であるが、経済関係の基本的姿は、人間同士が人的交流を深める姿である。交流することができる人間の能力を持つ市民を育てる必要性に私たちは面しているといえよう。将来のアジアで活躍する生徒たちをどのような市民として育てるか。このことは、ASEAN と日本・韓国・中国の東アジア地域共通の課題である。現在、私たちは、このような視点から、歴史的アプローチと新聞アプローチの二つのアプローチで、共同研究を進めている\*\*。

## 英語抄録

### 1. New citizenship

EU was organized in Europe. A new point of view was born by that in Europe. That is the thought of Multiple Citizenship. Derek Heater insists on this. He is an English political scientist. He thought as follows. An economy develops into the present world globally. Therefore, there are people who nationality is different in one state\*1. The point of view that

citizenship is only national right can't be appropriate for this reality. The new thought of Multiple Citizenship is necessary for us\*2. Citizen's right is the proposal that it isn't limited to the right given to it only by a state. In other words, one individual has some citizenship. This new point of view is important. It is because this point of view is different from the usual general idea of one citizenship in the modern nation. Only "citizenship as the nation" is not citizenship. This idea gives us more choices. For example, even if it is when states confront each other, citizens' cooperation and agreement become possible from the point of view which is different from the national position. Conditions with the civil society which overlaps like this are appearing in the society of the 21st century. When we are here, it is a local citizen, and we are the national people, and moreover we are a world citizen and an Asian, too. Like this, we are in the society of the plural which overlaps. Then, we touch many "information" in that society. There are some different positions in that information. Such globalization makes education change.

For example

1) Students realize a citizen when it has more than one citizenship.

2) Students choose that multiplex useful information, and assemble it, and judge it by themselves.

The education to develop such ability is necessary. Like this, economic globalization changes education. Well, what kind of reform will it be able to think about?

2. Two approach to notice more than one citizenship

1) Historical approach

We tend to be seized only with the point of view as a present national member. Such a situation is avoided. That method is to change a point of view to consider a present state to be the same from the ancient times. It is effective to learn history before the 18th century because of that. The strict border system like the present was not in Asia of the 18th century. There were many people who got around freely without being conscious of the border. The Japanese Government did precise control of the border in case of Japan in the 19th century from the 17th century. But, an area except for Japan was free in the network of China and Europe, and had active

interchange. The Japanese Government of that time used that network, and did controlled trade. Imports from the Southeast Asia were precious, and it dealt in them at the high price. The textile of Java and Malaysia and the plant were the high-class articles which the people wanted. Japanese development is supported by such history. When we get over a state and it cooperates, interchange relations in such history make the people's thoughtway global.

## 2) Newspaper approach

Globalization proceeded in the 20th century end, Japan. Cultural friction between the Japanese nationality inhabitant and the foreign census register inhabitant of the area is a social problem as that result. Because of that, the ability that an inhabitant himself solves cultural friction as a problem of the community is necessary. The learning that students propose future town-making is being done at school. As for this, to learn an area is to come global to learn. "global" is mixed with "local". Because of that, which comes to learn for learning of the benefit of "act locally" to be "think globally"\*<sup>3</sup>. The subject which is effective in such learning is a newspaper. Newspaper has the effect which knows actual society. Concern rises in the way of making use of a newspaper for the education in Japan. It is being called NIE (Newspaper in Education). Japan made a great mistake of "the war of aggression" in the first half of the 20th century. That error was done by using the democratic system. Japan in those days is a fact 【 to have the influence whose army was bigger than an assembly 】, too. But, journalism including the newspaper couldn't prevent war of aggression, and that was rather promoted. The Japanese people reflect on this. Therefore, journalists have value in the critical point of view. It is considering that the ability to introduce the ability to read information, and information is important in Japan. It is the result that it reflected on the history. Newspaper accounts are chosen by the journalists that it was trained, and printed on the paper, and provided. Which it is said that the newspaper issued every day has the amount of information which is the same as reading two books\*<sup>4</sup>. It is necessary for us to think from more than one point of view and to judge it in the globalization. A theme with the student is decided, and there is learning to make a newspaper by the learning to scrap newspaper accounts with that theme, and oneself to raise that ability. It has

reliability, and a newspaper is trusted as a media which introduces the latest information in present Japan. Because of that, a comment in the newspaper account and the newspaper is used for the entrance examination such as a university as well. Of course, such examinations are not learning to learn by heart, and read information critically, and it considers how to evaluate the logic power that a student himself clears thought. Recently, a computer network such as the Internet develops rapidly. But, newspapers are which still shoulder an important role as an important source of information in the education\*<sup>5</sup>.

## 3) The common issue of two approach

Students understand human mutual relationship as a result of learning history. Moreover, students read the latest information from some points of view, and untie it, and deepen critical thinking as a result of the learning which newspaper accounts were used for. Students think that they appreciate different information and a position. An opportunity for the discussion is necessary so that students may understand that it is good to have variety. Students should be given an opportunity for the discussion. One experiences many discussions. They have sympathy with others to each other as that result. I consider necessary ability in the actual global society when multiplex citizenship has that\*<sup>6</sup>. Two approach should be the learning which entails students' discussions with both\*<sup>7</sup>. There are others who have different culture in the classroom. The education which it made use of such an environment for. That is the different people's cooperation.

## 3. Economic globalization and future Asia

Asian regions are full of the information copied from Japanese fashion magazines and public entertainments magazines and the comics journal. And, there are signs of English, Chinese, Korean and Japanese in the city and the tourist spot. Information is transmitted to the area as well where it left Japan far in real time. Large quantities of information is being sent to the Japanese fashion, the music, games, animated characters, and so on by Japan. Net society makes the Asian people amplify interest in the Japanese articles at the same time with Japan. Whereas, there is criticism to the Japanese, too. For example, "Japanese force the way that one do it in South Korea, and Japanese talk in Japanese only



with Japanese in Thailand and Indonesia when it becomes an important topic. This is one of the local evaluation to the representative of the Japanese enterprise\*<sup>8</sup>. Such episodes show present condition for Japanese business to be moved through the production and the sales foothold to the Asian region. It means that the move of the person who guides technology and that technology proceeds that the Japanese culture moves. After 1980 years fee, various Asian countries adopted Japanese capital actively. Then, that was tied to the economic development. But, on the other hand, cultural friction happens. Economic globalization can't be said as the condition that only articles just come and go. Culture comes and goes at the same time with the articles with the person. That never appears on the foreign trade statistics. North America is pulled out, and trade with the Asian region is the first prize as for the Japanese trade value in statistics as well. For example, there is a case of the articles which articles made in Malaysia actually produced with the Japanese technology and the production control form. But, cultural friction there isn't shown in the foreign trade statistics. There are various troubles which Japanese business experiences in each place in Asia. That is an urgent subject for the young man in Japan which will work in each Asian area in the future. Economic globalization means that a human being cooperates. How do the people get along? As for the economic globalization, the need that human beings deepen others understanding is enhanced, too. It has one phenomenon which it should pay attention to in the Japanese economy in such globalization. While global articles circulate, as for that, value rises with local traditional articles as well. In other words, the value of the local traditional articles rises. And, televisions are global articles. The name of the Japanese domestic factory where that is made becomes a brand, and has the phenomenon which sells high in Japan, too. As for the economic globalization, interest in the area is raised conversely. The Association of Southeast Asian Nations must solve two subjects of the activation of the economic globalization and the area culture at the same time. Japan and South Korea, China will influence the future of the Association of Southeast Asian Nations greatly. Those are economical relations. But, it actually becomes the figure of the human beings' interchange. What kind of person do we bring up the students who are active in future Asia to? These

are the Association of Southeast Asian Nations and the common issue of Japan, South Korea, China. At present, we proceed with the joint research from such a point of view\*<sup>9</sup>.

Note

\*1 Derek Heater : WHAT IS CITIZENSHIP?, Oxford,1999.

\*2 NITANI SADA0. "with the aim of raising of the citizen who can connect the world history figure of the coexistence, symbiosis of the people, race" 'Social studies education research' (the separate volume the 2000th year research paper) 2001. Mr. NITANI SADA0 who is a Japanese social studies researcher is explaining such social recognition about "the citizenship" with an expression of "the symphony". Mr. NITANI says that social studies history education is to suggest historical consciousness as 1 citizen in the area world. Then, he insisted "It has large territories like a symphony." in the present area.

\*3 UOZUMI TADAHISA. for a 'global education' dawn document tassel 1995-year p42

The importance of think globally and act locally (It thinks globally, and acts in the area.) is said so that Mr. UOZUMI may point it out as a point of view of the global education.

\*4 IKEGAMI AKIRA 'newspaper study method', diamond company , 2006,p2

\*5 JAPAN NIE Society, 'It has such scholarship in the newspaper.', Toyokan publishing company , 2004

\*6 TSUCHIYA TAKESHI, "A change in the citizenship and the relations of the culture class" , 'culture and education' No.7 2007 pp.87-93

\*7 There are the following examples in the directions which teachers give to the students to promote a students' discussion.

1) Contents are cleared. (What kind of meaning is it? Would you speak a little more?)

2) It is made to add it. (Is there a case that it is added to the present opinion? Would you speak a little more in detail?)

3) It is made to introduce concrete cases. (Would you give a concrete instance? For example?)

4) A problem is cleared. (What is the most important problem?)

5) A background is cleared. (How was this like this?)

6) It is evaluated. (What is your opinion? Approval, opposition, halfway point?)

- 7) It is judged. (What do you do when you don't go well?)
  - 8) It is summarized. (Say a conclusion, please.)
  - 9) A result is cleared. (What happens if it is attained?)
  - 10) A result is defined. (What kind of result do you think to become?)
  - 11) A point of view is made to change. (What do you think is happening for five years rest?)
  - 12) Conditions are cleared. (What do you do if you can do anything?)
  - 13) Plus thinking (How do you teach if you teach to other people?)
  - 14) The choices expansion (What kind of point of view can you do?)
  - 15) Information is cleared. (What do you know now?)
  - 16) A project is cleared. (What kind of plan do you make?)
  - 17) An executive plan is made. (What kind of process do you carry it out with?)
  - 18) Contents of learning are cleared. (What did you learn?)
  - 19) Failure is changed to the good experience. (How will you do it next time if you start over again?)
  - 20) Reliable understanding (Collect it by using the key word. What kind of relations are they?)
- \*8 SONODA SIHIGETO 'Japanese businesses to Asia', Yuhikaku, 2001
- \*9 It is a helpful book. HARADA TOMOHITO edition 'The point of an argument, issue of the national identity for the class', Meiji Tosho, 2006

### 韓国語抄録

#### 경제의 글로벌화와 교육의 역할

##### 1. 경제의 글로벌화와 새로운 시민권

유럽에서 EU가 성립되었다. 그로 인해 유럽에서 새로운 시점이 탄생했다. 그것은 Multiple Citizenship 이란 사고방식이다. 이는 Derek Heater가 주장하는 것이다. 그는 영국의 정치학자이다. 그는 다음과 같이 생각했다. 오늘날의 세계는 전 세계적으로 경제가 발전하고 있다. 이 때문에 한 국가 안에 다수 국적을 가진 사람들이 존재한다. 그러므로 국민에게만 주는 시민권이라는 발상은 현실에서는 적용되기 어렵다. 우리에게

는 Multiple Citizenship 이란 새로운 사고방식이 필요하다\*1. 그의 이와 같은 제안은 시민의 권리는 국가로부터만 주어지는 권리에 한정되지 않는다는 제안이다. 즉, 한 개인이 복수의 시민권을 갖는다\*2.

이 새로운 시점은 중요하다. 왜냐 하면 이 시점은 근대국가에 있는 일종의 시민권과는 다르기 때문이다. '국민으로서의 시민권' 만이 시민권이 아니다. 이 발상은 우리에게 보다 많은 선택폭을 제공한다. 예를 들어 국가 간 대립되는 경우에서도 국가의 입장과는 다른 시점에서 시민끼리의 협력이나 합의가 가능하다. 이처럼 21세기 사회는 복수의 시민 사회에 소속되는 그런 사회가 출현하기 시작한다. 우리는 때로는 지역 시민이기도 하며, 혹은 한 국가의 국민이기도 하고, 또한 세계 시민인 동시에, 아시아인이기도 한다.

이와 같이 우리는 서로 중복되는 복수의 사회에 존재한다. 그리고 우리는 그 사회에서 입장이 다른 여러 '정보' 들을 접하게 된다. 이러한 세계화는 교육을 변화시킨다. 즉, 1) 시민이 복수의 시민성과 관련되어 있음을 자각한다. 2) 그 다중성 속에서 유익한 정보를 선택하여 짜맞추며, 스스로 판단한다. 이러한 능력을 신장시키는 교육이 필요하게 된다. 이처럼 경제의 글로벌화는 교육에 영향을 미친다. 그러면 학교 교육에서는 어떠한 변화가 나타날 것인가?

#### 2. 복수의 시민권을 인식하기 위한 두 가지 접근방식

##### 1) 역사적 어프로치

우리는 현재 우리가 속한 국가의 일원으로서의 시점에만 얽매는 경향이 있다. 그러한 상태에서 벗어나자. 그 방법은 현재의 국민국가가 고대로부터 변하지 않는 관점을 바꾸는 것이다. 우리가 구시대의 시점을 개선하기 위해서는 18세기 이전의 역사를 공부하는 것이 효과적이다. 18세기 때 아시아는 현재와 같은 엄격한 국경 시스템은 존재하지 않았다. 국경을 의식하지 않고 자유로이 이동하는 사람들이 많았다. 일본의 경우는 17세기부터 19세기에 일본 정부가 엄밀한 국경 관리를 하였다. 그러나 일본 이외의 지역은 중국이나 유럽의 네트워크 속에서 자유롭게 활발한 교류가 있었다. 그 시기의 일본 정부는 그러한 네트워크를 이용하여 관리 무역을 진행하였다. 동남아시아 지역으로부터의 수입품은 귀했으며 고가로 거래되었다. 자바나 말레이시아의 직물이나 식물 등은 사람들이 탐내는 고급품이었다. 일본 발전은 그러한 역사에 힘입었다. 우리가 국가를 초월하여 협력할 때 이와 같은 역사상의 교류 관계는 사람들의 사고방식을 지구촌화한다. 이러한 역사적 시점은 세계화의 진전과 함께 중요성을 증대시킨다\*3.

## 2) 신문 어프로치

20세기말 일본에서는 글로벌화가 진행되었다. 그 결과 지역에 거주하는 일본 국적을 지닌 주민과 외국 국적 주민 간의 문화 마찰이 사회 문제화 되었다. 이 때문에 문화 마찰을 지역 사회 문제로써 주민 스스로가 해결하는 능력이 필요하다. 학교에서는 학생들이 미래의 마을형성을 제안하는 학습이 진행되고 있다. 이는 지역 학습이 글로벌 학습이 된다는 것을 의미한다. 'local' 과 'global' 이 혼재되고 있다. 그래서 'act locally' 를 위한 학습이 'think globally' 를 위한 학습이 된다\*4. 이러한 학습에 효과적인 교재가 신문이다. 신문은 현실 사회를 아는데 효과적이다. 일본에서는 학교 교육에서 신문을 활용하는 교육 방법이 주목받고 있다. 이는 NIE (News in Education) 라고 불리고 있다. 일본은 20세기 전반에 '침략전쟁' 이란 커다란 잘못을 저질렀다. 그 잘못은 민주주의 시스템을 이용해 행해졌다. 당시 일본은 군대가 의회보다 큰 영향력을 가지고 있었다는 것도 사실이다. 그러나 신문을 비롯한 저널리즘이 침략전쟁을 막을 수가 없었을 뿐더러 오히려 그것을 촉진하였다. 일본인들은 이를 반성하고 있다. 그러므로 저널리스트들은 비판적인 시점에 가치를 둔다. 일본에서는 정보를 읽고 이해하는 능력과 정보 전달 능력이 중요하다고 인식되고 있다. 역사를 반성한 결과이다. 신문은 훈련된 저널리스트들에 의해 선택된 후 종이에 인쇄되어 제공된다. 날마다 발간되는 신문에는 책 두 권을 읽는 것과 같은 정보량이 있다고 한다\*5. 글로벌화 속에서 우리는 복수의 시점으로 생각해 판단하는 것이 필요하다. 그러한 능력을 기르기 위해서 학생이 어떤 테마를 정해 그 테마로 신문 기사를 스크랩하는 학습이나 학생 스스로 신문을 만드는 학습이 있다. 신문은 신빙성이 있으며 또한 최신 정보를 전달하는 매체로서 오늘날의 일본에서는 신뢰를 받고 있다. 그러므로 대학 등 입학시험에서도 신문 기사나 신문의 논설이 이용되어 있다. 물론 그러한 문제는 외우는 학습이 아니라 정보를 비판적으로 이해하여 학생 스스로의 생각을 명확하게 하는 논리력을 평가하는 방법으로 간주되고 있다. 최근에는 인터넷을 비롯한 컴퓨터 네트워크가 급속히 발전되고 있다. 그러나 신문은 여전히 중요한 정보원으로서 교육의 중요한 역할을 담당하고 있다\*6.

## 3) 두 가지 어프로치의 공통과제

역사를 학습한 결과 학생들은 인간의 상호관계를 이해한다. 또한 신문을 이용한 학습의 결과, 학생들은 몇 가지 시점에서 최신 정보를 해독해 비판적인 사고를 깊게 한다. 그들은 다른 정보나 입장을 이해하면서 생각한다. 다양성의 좋은 점을 이해하기 위해 토론의 기회가 필요하다. 학생들에게는 토론의 기회가 주어줘야

한다. 스스로 토론을 경험한다. 그 결과 그들은 서로가 타인에 대해 공감을 한다. 그것은 다중적 시민성이 있는 현실의 글로벌 사회에 필요한 능력이라 생각된다\*7. 그러므로 전술한 두 가지 어프로치는 학생들의 토론이 수반되는 학습이다\*8. 교실에는 문화적으로 다른 타자가 있다. 그러한 환경을 활용한 교육 실천이 현재 일본 사회를 비롯한 글로벌화된 사회에 공통되는 오늘날의 과제이다.

## 3. 경제의 글로벌화와 미래의 아시아

아시아 지역에서는 일본 패션 잡지나 연예 잡지, 코믹 잡지에서 모방한 정보가 넘쳐나고 있다. 또한 도시나 관광지에서는 영어는 물론 중국어, 한국어, 그리고 일본어 간판이 있다. 일본에서 멀리 떨어진 지역에도 정보는 실시간으로 송신된다. 일본 패션이나 음악, 게임, 애니메 캐릭터 등 수많은 정보가 일본에서 발신되고 있다. 인터넷 사회에서는 인터넷을 통해 실시간으로 일본 상품에 대한 관심을 증폭시키고 있다.

그러한 상황 속에 한편으로 일본인에 대한 비판도 있다. 예를 들어 '일본인은 한국에서는 자기네들의 방법을 강요하고 태국이나 인도네시아에서는 중요한 화제가 되면 일본어로 일본인끼리 이야기를 한다' . 이는 일본계 기업 주재원에 대한 현지 평가의 하나이다\*9. 이러한 에피소드는 일본 기업이 생산이나 판매 거점을 아시아 지역으로 옮기고 있는 현상을 나타내고 있다. 일본 문화가 전이된다는 것은 기술이나 그 기술을 지도하는 사람의 전이도 병행됨을 의미한다. 1980년대 이후 아시아 여러 나라들은 적극적으로 일본 자본을 받아들였다. 그리고 그것을 경제 발전에 연결시켰다. 그러나 그 반면, 문화 마찰이 생겼다. 경제 글로벌화는 단순히 물건만이 오가는 상태가 아니다. 물건과 동시에 사람과 문화가 왕래한다. 그것은 무역 통계상으로는 나타나지 않는다. 일본 무역액은 통계상으로도 아시아 지역과의 무역이 북미를 누르고 제 1위이다. 예를 들어 말레이시아제 상품이 실제로는 일본의 기술과 생산관리방식으로 생산된 상품인 경우가 있다. 그러나 그곳에서의 문화 마찰은 무역 통계에는 나타나지 않는다.

일본 기업이 아시아 각지에서 경험하는 여러 가지 마찰이 있다. 그것은 앞으로 아시아 각 지역에 진출해 일을 하게 되는 일본 젊은이들에게 절실한 과제이다. 경제 글로벌화는 인간이 서로 관계를 맺는 것을 의미한다. 사람들이 어떻게 교제할 것일까. 경제의 글로벌화는 인간끼리 타자 이해를 필요로 한다.

그러한 글로벌화 속에서 일본 경제에서 주목할 만한 현상이 하나 있다. 그것은 글로벌 상품이 유통되는 한편, 로컬의 전통적인 상품도 가치가 높아지고 있다는 것이다. 즉, 지역의 전통적인 상품 가치가 높아지고 있

다. 또한 원래는 세계적인 상품인 TV 수신기도 제작된 일본 국내 공장 이름이 브랜드화 되어 고가로 판매되는 현상도 있다. 경제의 글로벌화는 지역에 대한 관심을 오히려 높인다.

ASEAN 은 경제 글로벌화와 지역 문화 활성화라는 두 가지 과제를 동시에 해결해야 한다. 일본이나 한국, 중국은 ASEAN 의 장래에 크게 관계가 있다. 그것은 경제적인 관계이기는 하지만 실제로는 인간끼리의 교류라는 모습을 띤다. 우리는 장차 아시아에서 활약하게 될 학생들을 어떤 사람으로 키울 것인가? 이 문제는 ASEAN 과 일본, 한국, 중국의 공통 과제이다. 현재 우리는 이러한 시점에서 역사적 어프로치와 신문 어프로치의 두 가지 방법으로 공동연구를 진행하고 있다\*10.

주석

\* 1 Derek Heater : WHAT IS CITIZENSHIP?, Oxford, 1999

\* 2 니타니 사다오 (二谷貞夫) 「민중·민족의 공존·협생(協生)의 세계사상(世界史像)을 연결할 수 있는 시민의 육성을 지향하며」 『사회과교육연구』 (별책 2000 년도 연구보고) 2001. 「시민」에 관한 이러한 사회 인식은 일본의 사회과 교육 연구자인 니타니 사다오가 「중주(重奏)」라는 표현으로 설명하고 있다. 니타니는 사회과 역사교육은 지역 세계에 있어서 한 시민으로서의 역사적 자각을 촉진하는 것이라고 한다. 그리고 그는 그 지역은 ‘중주적인 광범위 영역이 설정되어 있다’고 주장하였다.

\* 3 쓰치야 다케시 「글로벌화와 역사 교육 -21세기형 역사 학습의 프레임 워크를 구성하기 위하여-」, 『글로벌 교육』 Vol.6, 2004, pp.14-27.

\* 4 우오즈미 다다히사 (魚住忠久) 『글로벌 교육』 여명서방, 1995, p42. 글로벌화에 대응한 학습의 시점에서 우오즈미 다다히사가 지적하는 것과 같이 ‘think globally, and act locally (지구 규모로 생각해 지역에서 행동한다)’의 중요성이 주장되어 있다.

\* 5 이케가미 아키라 (池上彰), 『신문 공부 방법』, 다이아몬드사, 2006, p2

\* 6 일본 NIE 연구회, 『신문으로 이러한 학력이 붙는다』, 동양관출판사, 2004

\* 7 쓰치야 다케시 (土屋武志), 「시민성의 변화와 교양 수업」, 『교양과 교육』 제 7 호, 2007, pp.87-93

\* 8 토론을 촉진시키기 위한 교사의 지시에 대하여, 상세한 내용은 쓰치야 다케시 「사회과 수업에 있어서 토론의 중요성」, 『아이치교육대학 교육실천 총합센터 기요』, 제 10 호, 2007, pp.183-190 을 참고할 것.

\* 9 소노다 시게토 (園田茂人), 『일본기업 아시아로』, 유비각, 2001

\*10 참고로 되는 문헌으로써 다음과 같은 것이 있음. 하라다 도모히토 (原田智仁) 편, 『「국민적 정체성을 둘러싼 논점·쟁점과 수업 구성」』, 명치도서, 2006

## 日本語部分注

\* i Derek Heater : *WHAT IS CITIZENSHIP?*, Oxford,1999.

\* ii 二谷貞夫 「民衆・民族の共存・協生の世界史像を結べる市民の育成をめざして」 『社会科教育研究』 (別冊2000年度研究報告) 2001. 「市民」に関するこのような社会認識は、日本の社会科教育研究者である二谷貞夫が「重奏」という表現で説明している。二谷は、社会科歴史教育は、地域世界における一市民としての歴史的自覚を促すことであるという。そして、彼は、その地域は、「重奏的な広領域が設定されている」と主張した。

\* iii 土屋武志 「グローバリゼーションと歴史教育—21世紀型歴史学習のフレームワーク作りのために—」, 『グローバル教育』 Vol.6, 2004, pp.14-27.

\* iv 魚住忠久 『グローバル教育』黎明書房 1995年 p42

グローバル化に対応した学習の視点として魚住忠久氏が指摘するように、「think globally, and act locally (地球規模で考え、地域で行動する)」の重要性が言われている。

\* v 池上彰, 『新聞勉強術』, ダイヤモンド社, 2006 p2

\* vi 日本NIE研究会, 『新聞でこんな学力がつく』, 東洋館出版社, 2004

\* vii 土屋武志, 「市民性の変化と教養授業」, 『教養と教育』第7号, 2007, pp.87-93

\* viii 討論を促すための教師の指示について, 詳しくは, 土屋武志 「社会科授業における討論の重要性」, 『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第10号, 2007, pp.183-190を参照。

\* ix 園田茂人 『日本企業アジアへ』有斐閣2001

\* x 参考となる文献として次のものがある。原田智仁編 『「国民的アイデンティティをめぐる論点・争点と授業づくり」』, 明治図書, 2006

付記 本研究は, 平成19年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「思考力を育てる歴史学習教材の構築原理—構築主義による教材開発—」研究代表者土屋武志 (課題番号18530694) による研究成果の一部である。